

モンゴル帝国勃興の鍵に迫る一冊

白石典之編
チンギス・カンとその時代

船田 善之



A5判 396頁
勉誠出版
[本体 3800円 + 税]

チンギス・カン——いわずと知れたモンゴル帝国の創始者である。モンゴル帝国が世界史に与えた影響の大きさが見直されるようになって久しく、その研究は大きな成果を得てきた。チンギス・カン（テムジン）については、それ以前より

多くの研究蓄積があるものの、その実像、そして帝国勃興の過程やその背景については、本書の「はじめに」でも述べられていたように、多くの問題が不明、ないし未説明のままである。その理由として、第一に、各言語史料間の記述の齟齬をどのように解決するかという極めてやっかいな難題に直面していること、第二に、『モンゴル秘史』以外は、ケレイトのトオリル（オン・カン）の下で頭角を現すまでのチンギス・カンの前半生についての叙述が極めて貧弱であることが挙げられる。この文献史料の制約を受けて、早期のチンギス・カ

ンの伝記的研究は、基本的に『モンゴル秘史』をトレースした形ものがほとんどであった。そして、近年のモンゴル帝
国史研究の進展は、いくつかの例外を除けば、帝国成立後に
偏ってきたといえる。

このモンゴル帝国の勃興のプロセスという難題に対して、
編者の白石典之は、考古学・自然科学・文献史学の学際的な
共同研究を組織し、果敢に挑んできた。その成果の一端は、
環境に焦点を当てた同編『チンギス・カンの戒め—モンゴル
草原と地球環境問題—』（同成社、二〇一〇年）として刊行さ
れた。そして、一〇年あまりの研究の到達点を包括的にまと
めたのが本書である。周知のように、編者は、二〇数年にわ
たり、モンゴル帝国を中心とする考古学の発掘調査・研究に
従事しており、この分野で世界を代表する研究者の一人であ

る。すでに、『チンギス・カンの考古学』（同成社、二〇〇一年）、『モンゴル帝国史の考古学的研究』（同成社、二〇〇二年）という二冊の学術的著作を世に問うている。一般向けの『チンギス・カン―蒼き狼―の実像―』（中央公論新社、二〇〇六年）では、考古・文献双方に基づいて新たなチンギス・カン像を提示している。

本書の本論部分は一五章から成り、さらに本論の内容や関連事項を理解するための助けとして九編のコラムが挿まれている。本論は、デイシプリンから便宜的に、①文献史学の第一―三、五、一五章（政権の成立過程と統治制度、国際関係、世界戦略と交通、文字、近代におけるチンギス・カン崇拜）、②環境学の第六・七章（気候変動、植生）、③考古学の第四、八―一四章（銭、食、住、鉄、武器と防具、弓矢、防塁、墓）、という三つのグループに分けることができる。当然ながら、それぞれの部分は、他のデイシプリンの手法や成果も取り入れて考察されている。

各章の多くは、近年の発掘調査や研究の成果を盛り込み、あるいは独自の視点を導入し、新たな知見を提出しており、最新の研究を発信する研究論文集としての水準を備えている。同時に、一般の読者にも十分理解できるように、明瞭かつ平易な叙述がなされている。主として既知の内容に基づい

た若干の部分も、当該あるいは他の章や全体の理解を促すために必要不可欠のものとして紙幅を割いているといつてよい。そして、何よりも強調したいのは、本書を通読して感じる、共同研究の成果としての各章の有機的なつながりである。共同研究の成果は、しばしば本書のような論文集として刊行されるが、個別の研究成果の寄せ集めに終わってしまうことは少なくない。しかし、本書はそうではない。全体のテーマと目標に対して、メンバーがしかるべき役割を分担し、かつ知見や手法・アイデアを共有しながらインタラクティブに執筆したことが窺える。編者のリーダーシップとメンバー相互の信頼関係の賜物であろう。この共同研究を推進した編者と執筆者に敬意を表したい。

それでは、本書の特徴やそこから得られる知見を、評者の問題関心に基づいてピックアップして紹介しよう。①文献史学から二点。まず、テムジンが登場した時期のモンゴル高原を大金国とカラ・キタイ（西遼）の両大国のパワー・ポリテイクスの中に置いて叙述したことが注目される。モンゴル高原諸勢力によるカラ・キタイの君主号グル・カンの使用やケレイト王国のトオリル（オン・カン）の一時的なカラ・キタイ亡命などから、説得力のある説明がなされている（二章）。テムジンに敗れたトオリルやジャムカ（名乗った称号はグル・

カン)も西方を目指して逃亡したことや、同じくテムジンに滅ぼされたナイマンの王子クチュルクがカラ・キタイに亡命したことも傍証となるだろう。「おわりに」で今後の課題とされているように、考古資料からの検証も期待される。大金国やカラ・キタイと同様、二章で重要な存在であったことが言及される西夏も、モンゴル高原の諸集団の抗争に大きな影響を与えたはずである。トオリルの弟のジャア・ガンボも西夏に捕らえられたことがあったが、滞在中に尊敬を受けていたと伝えられる。本書は、おぼろげであったテムジン登場前後のモンゴル高原の状況の解明を前進させたと同時に今後進むべき方向性を示してくれた。

次に、チンギス・カンの世界戦略が、モンゴル自身よりはむしろウイグル・ムスリム商人の視点から、すなわち軍事よりはむしろ商業の面から説明される(三章)。学界では商人・商業の重要性も指摘されてきたが、一般にはまだそのイメージは定着していない。また、学界でもどちらかというところオゴデイやクビライ以降の状況として強調されていた傾向がある。チンギス・カン時代の軍事拠点と交通路の建設・確保、商人の動向、商業政策の関連性が明快に描かれている。そして、ここでもチンカイ城の比定という考古学調査・フィールド調査の成果が活用されている。

②環境学については、湖底堆積物や氷河のアイスコアなど様々なデータから草原及び森林地帯の乾燥・湿潤の変動や植生の変遷を復元する。各種データの積み重ねによって、モンゴル高原あるいは一三世紀前後の環境復元が行われ、それを長期変動及び中央ユーラシアという広域の範囲に位置付けることが試みられている。そして、それぞれ次のような結論が導かれる。まず、牧畜・農耕の住み分けがみられる(狭義の)中央ユーラシア(東西トルキスタン)と比して、夏場の集中的な降雨に恵まれ、遊牧のみに依拠することが可能なモンゴル高原の特質が指摘される。両地域の対比が各種の環境データによって実証的に示された(六章)。次に、モンゴル高原の少なくとも山地においては、歴史時代に植生変化がみとめられない。より多くの地点の復元が必要であると譲歩しているが、植生が人間活動の影響を受けていないと結論する。これは、遊牧が森林植生に影響を与えてこなかったことを意味し、それが森林の持続可能性を保証する生業であることを示唆している(七章)。ともに、データが得られる地点という条件付きであるが、今後のモンゴル高原ないし中央ユーラシアの環境変動のより緻密な復元の可能性を期待させる論考である。文献史学の研究者による執筆であるが、環境史の成果を取り込んだコラム一も、運河の活用という人間の事情から南流黄

河が長く固定されていたことを論じながら、近年の中国政府に主導される「南水北調」（長江の上・中・下流から三つのルートにより南方の水を北に転送する事業）にまで言及するなど、長期的な視点からまとめられている。

③考古学については、大定通宝が聖域に持ち込まれる貨幣であったこと、大朝通宝がそれを模倣して铸造されたこと（四章）、いわゆるチンギスカン防塁が漢ではなく西夏の遺構であること（二三章）など、多くの謎と議論を解明・解決している。また、モンゴル帝国の考古学が本格化した時期には、当然ながら重要な課題であった遺跡・遺構の年代確定、プランの分析、機能の考察に重点が置かれていたが、本書では、これらだけでなく、生活・祭祀の痕跡や当時の人々の息づかいがわかるようになっており、近年の長足の進展を実感させる。

三浦秀一著
科挙と性理学 明代思想史新探

明代の性理学の展開を社会史的・哲学的角度から分析。科挙関連の知的営為が、明代思想史を動かす重要な因素であることを実証的に解明する。
6500円
《目次》導論／性理大全書の書誌学的考察／明代科挙、性学策史／明朝各省郷試事略／明朝提学官物語／湛若水二業合一論とその思想的 position／王門欧陽徳の学門とその会試程文／提学官王宗沐の思想活動

既刊 中国心学の稜線 元朝の知識人 三浦秀一著 9500円
と儒道仏三教

このように、本書は長期的かつ様々な視点から、チンギスカンの時代を総合的に叙述した最新の成果であり、研究者の利用と一般読者への還元の双方を兼ね備えた内容となっている。以下、望蜀の言を述べることで批評の責を塞ぐこととしたい。第一に、千戸制・分封制・親衛隊・裁判・宮殿などチンギス・カンの統治制度が簡潔に解説される（二章）が、別に章を立てて詳述した方が、読者の理解を深めたであろう。第二に、環境学の部分は予断を排除した堅実な行論ではあるが、

モンゴル帝国の勃興と瓦解については、早くから環境変動の影響が想定されてきているだけに、限定的・暫定的でも、環境の影響に一定の見解を提示してほしかったところである。第三に、防塁の時期比定に際して、その尺度が西夏の建築物で用いられていた二種の尺度のうちの一方と合致することが

李世瑜著／武内房司監訳
中国近代の秘密宗教

黄天道・一貫道や在理教などを秘密結社とせず、新たに秘密宗教と定義し直し、考究した『現在華北秘密宗教』天津在理教調査報告の完結。
4800円
《目次》吳沢霖序／グロトウス序／自序／増補版序 訳者解説 武内房司／緒論 黄天道／一貫道／皈一道／一心天道龍華聖教会／天津在理教調査報告

既刊 中国民間仏教教派の研究 オハラマヤ著 林原文子訳 5500円

研文出版 〈税別〉

東京・神田神保町2-7 ☎3261-9337
http://www.kenbunshuppan.com/

根拠として挙げられる(二三章)。この実証に異論はないが、西夏で二種の尺度が用いられた背景、さらに防塁の尺度がその一方と合致することの意味についても検証が望まれる。第四に、モンゴル国及び内モンゴルからの留学生を対象として行ったチンギス・カンのイメージに関するアンケート調査(コラム九)の分析は、興味深い。ぜひ有意なサンプル数で実施してほしい。

続いて、若干の事実誤認と誤植の指摘及び補足をしておく。三七頁でチンギス・カンの王庭で情報と技術をもたらした人々の一つとしてソグド人を挙げるが、この時期、彼らがエスニシティに類するようなまとまりをなお保持していたとは考えがたい。あるいは「ウイグル人」の誤記か。四〇頁の Juzjani 1881、五五、五七頁の杉山二〇一〇が参考文献に見えない。七七頁ほかの「邱処機」の「邱」は清代に孔子の諱を避けたことによる表記なので「丘」が適切。一〇四頁の『元史』タタトゥンガ伝の日本語訳「故の主君(タヤン)に授けよう」は原文も「授」であるが、ここでは「返還する」の意。一二二頁で言及する『元史』巻一「太祖本紀」については、小林高四郎の日本語訳注がある。なお、同箇所「夷敵」は「夷狄」。一二二―三頁の『集史』について、底本など問題点も指摘されるもの、Thackston による第一巻「モンゴル史」

英語訳も紹介しておきたい。三二〇頁の「祁連」の現在の発音「チーニエン(Chien)」は「チーリエン(Chien)」。

以上は、ないものねだりや瑕疵に過ぎず、本書の価値を低める類いのものではない。本書が、堅実かつ新しいチンギス・カン像とその時代像を提示してくれたことを、改めて強調したい。最後に、編者らが、チンギス・カン研究をさらに継続して本書の提示した課題を解決するとともに、彼に続くオゴデイ以降についても類書をまとめることを期待して摺筆する。

(ふなだ・よしゆき 九州大学)

日本儒教学会創立大会開催のお知らせ

▼日時…5月14日(土) 13時00分～18時00分(受付11時30分より) ▼場所…東洋文庫講演室 ▼参加費…一五〇〇円(併設の儒教展が半額(四五〇円)で見学できます) 懇親会費…一般五〇〇円、学生二五〇〇円 ▼プログラム…開会挨拶 土田健次郎(早稲田大学)、シンポジウム「日本における儒教研究の現在」司会…伊東貴之(国際日本文化研究センター) 1. 日本近世儒教 前田勉(愛知教育大学)、2. 日本近代儒教 河野有理(首都大学東京)、3. 朝鮮儒教 山内弘一(上智大学)、4. 中国古代儒教 渡邊義浩(早稲田大学)、5. 中国近世儒教 小島毅(東京大学)、6. 中国現代儒教 中島隆博(東京大学)、総合討論、総会、懇親会(東洋文庫レストラン「オリエントカフェ」)